或る陽、或る殊。

あばうと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
或る陽、或る殊。

【Ｎコード】
Ｎ８９０３Ｚ

【作者名】
あばうと

【あらすじ】
ごく平凡な生活をしてきた文韻　殊波の高校生活が始まった。その裏で彼女の直感が何かを危惧しはじめている。

序章（前書き）

物語が進むにつれ、キーワード・ジャンルから離れる恐れがあります。
あらかじめご了承ください。

序章

これまでの１５年間は何をしてきたのか。特に意義を見出さずに生きてきた。のだと思う。
平凡すぎて、つまらない人生を送ってきた。気がする。

そんな事を一日中、コタツにもぐってぼんやりと考えていました。
視界には電気と天井がずっと入ってきている。でもなぜか姉と妹には、自分の眼の焦点がどこに合わせているのかを分かってもらえませんでした。かく言う自分にも分からなかったのですが。
突然何かを思いつき、自分の部屋に戻ってから、アルバムとトロフィーのある、物が散乱した勉強机と、それを使うのによく座るイス。そのイスで視界をグルグル回して目を回していました。特に意味はありませんがね。
「今日の姉ちゃん、いつも以上におかしい」
そんな妹の言葉が聞こえたような気がしたが、気のせいだと思いたい。とにかくそのくらい、ほぼ一日中放心状態になっていました。
間接的に悪口言ってるようですが、それでも気になりませんでした。
結局４月７日は、こんな過ごし方でしたかね。あんだけぼんやりしていれば、視界に入ってくるものはみんな同じ景色ですよ。

翌朝。今日からハレて合格した高校に通い始める。新しい制服を着て、気持ちを新たに１からのスタート。家から自転車で２０分弱くらい。周りにはいろいろな施設もあり、何かと不便は感じさせないような地域で、近場といえば近場…になる距離ではあった。
近場にも関わらず、幼なじみはおろか、知ってる人は誰一人としてこのＣ組にはいなかった。私はどこか腑抜けた顔で、「知らない人」と「知らない人」の会話を３３番の席で聞いていた。

C組には35人の生徒がいる。自己紹介で何となくではあったが「知らない人」の特徴が分かった。出席番号1番の飯田君から、私の2つ後の横瀬さんまで。33番である私の『文韻(ふみね)』という苗字は、周りの人からすれば、珍しいのか読めないのか、名前を聞いて不思議な表情を浮かべていた人が大多数だった。

私は文韻家に生まれ、三姉妹の真ん中の存在にいます。長女である姉の『琴乃(ことの)』、次女の私『殊波(ことは)』、三女の妹『海和(みお)』という三姉妹で、やや女系家族の方向にある一家です。先に言っておきます。私と姉は名前が似ていますが双子ではありません。姉は大学生で、教員免許取得のために努力しています。妹は今年度から小6で、交友関係も深いようです。私にはそんな風に見えないから不思議です。

C組みんなの自己紹介が終わったのち、みんなこれから一年をともにする仲間に、あいさつを軽くかわしながら中学校の思い出とかを話していた。
自分はぶっちゃけ昨日の続きをしたかった。けどそれは「みんな」が許してくれなかった。

序章（後書き）

とりあえず、はじめましてでしょうか。
わけもなく、処女作として書かせてもらいました。見苦しいかもしれませんが、どうか温かい目でよろしくお願いします。
まず…既にここにいろいろ書こうとするのはマズいのでしょうかね。
右も左もわからないうちに、思いついた物語を推敲しつつ、なるべく話がそれないように…それないように…と頑張ってきました。

まあ、それましたけど。
この文章を書いている頃、もうすでに3つ分の区切りまでは書けているんですよ。もうだいぶこの文章からは道をはずしてます。
伏線を気にしながら、あとは行き当たりばったりのアドリブがほとんどです。それに日本語の間違いとかを少しずつ修正して、清書。
もうめちゃくちゃです。
それでも「よろしくない方向」には進まないのでご安心を。

この物語は連載形式で行きたいと思っています。
序章なのでほとんど物語については進展がありませんが、少し意味ありげな言葉はいくつかあります。

小説に関しては…なにかヨソサマの小説の書き方を盗ったかのような書き方ですね。でもこれオリジナルです。まあ人物設定とかは、他の協力者に手伝ったりしてもらいましたが、本文に関しては完全オリジナル…で、あってほしいです。

とりあえず、このような形であとがきとさせてもらいます。
次回のあとがきは、第一章が終わったら書く予定です。

この物語を気に入ってくれる人が一人でもいれば幸いです。
次回の投稿は未定ですが、続けますのでよろしくお願いします。

第一章　？その日の夕方

入学式…？ああ、明日です。
私立高で、いわゆる「マンモス校」なんです。校内ではとてもではありませんが、開ける場所もないようで、市営のホールを貸切で使うらしいのですが、今日は他の学校が使っているようで、私たちの入学式は明日なんです。一応今日は、「顔合わせ」という意味での登校なんです。

学校も終わり、放課後。「今は」まっすぐ家に帰るような習慣にする。とりあえず自転車で２０分かかる通学路。何も道がワンパターンなわけではない。そこで思いついた帰り方が、「開拓帰宅（今名付けたとかそういうことは黙っておきます）」だ。東西南北だけを気にして、あとは気の向くままに道を進む。
たまに行き止まりから引き返す。
細い入り組んだ路地には新発見がたくさんあった。

「ただいまー。あー疲れたー」
「ん、姉ちゃん。」
一人で妹がくつろいでいた。
「夕飯。」
「は？」
いきなり単語を言われた。
「いやだって、お姉ちゃんが姉ちゃんに今日は講義だから夕飯よろしく頼むってさっき電話が。」
妹は、姉の琴乃を「お姉ちゃん」、私殊波を「姉ちゃん」と呼ぶクセがある。区別がついて分からなくもないが、やっぱり私を少し馬鹿にしている感じがする。

というか、疲れていたから部屋で少し寝たかった。
私は一旦部屋に戻り、制服から部屋着に着替えた。

料理は最近腕前もよくなってきた。創作・アレンジ料理も思いつくこともしばしば。
それでも姉には到底かなわない。うまく表現はできないが、隠し味的なものが隠し味としてちゃんと機能している。
妹も私の料理には「おいしい。」とは言ってくれている。あの娘のことだし、その真偽がどうかは別として。

夕食も終え、１１時を過ぎたころ。妹が寝ついた頃だろうか。私は明日の入学式の準備をしつつ、部屋のアルバムとトロフィーを見て、昔にひたっていた。高校でもできるだろうかと。

「うおぉぁ！」
姉が帰宅したのに気付かず、部屋に入ってきたのに驚き、変な声をあげてしまった。
「た…ただいま…。」
悪気はないのだろうけど、笑いをこらえながら言った姉に、軽い怒りを抑えおかえりと返した。
同時に私はこの瞬間、遅かったのは講義のせいじゃないなという疑心が生じた。

そうしているうちに準備も終わり、私はベッドにもぐって眠りに落ちました。

……。

……？
「……と……らない？」
よくわからないが、若い感じの男の人の声がする。
「あ、……あ…た…いねさん…ふみねさん…！」
…文韻さん？
「おい文韻さん困ってんぞ…。」
「ん？なんで。」
なるほど、少しデリカシーに欠けている人なのか。

閑話休題。
「とりみだしてゴメン。……今度の陸上部の大会、文韻さんも中距離でいいんだっけ？」
どこかで見たことありそうな…普通にいそうな（ぶっちゃけ地味な）……少なくとも先輩の、高校生・大学生くらいの男の人だった。
「えー…。…はい。」
なぜ自分は返事をしたのだろう。
「じゃあ、あとで一緒に走りに行こうな！中距離参加メンバーで特訓すんだよ。」
「あーえー、そうなんですか。わかりました。」
だからなぜ…
「そんじゃあ、四日後予定明けといてな。その日はずっと走り込みな。」

「…は？…ったぁー！」
目を開けると毛布にくるまっている自分がいる。なるほど、夢か。
目覚まし時計が私のおでこを痛撃。赤くなった感じがする。
というか私の脳内の底にはこんなものがあったのか。
それにしても…「走り込み」「四日後走っていこうな」……ん？

夢の内容はさっき見たはずなのに、思い出せない。

時計を見ると…明方５時３７分。二度寝するにもできない微妙な時刻だったので、私はそのまま起きることにした。

第一章　？4月9日～10日

4月9日　（金）
桜が満開で私達を迎えてくれた市営ホール。ここで私立「疇攅大学付属高等学校」の入学式が盛大にとり行われた。特に代わり映えしない、何の変哲もない入学式だった。

ただ、校長先生である円山　徹という人の話の最中は、何か落ち着かなかった。
確かに、「友情を深め、この3年間を一生の宝物として、誇りをもって卒業できるように全力で尽くしていきたい」とそれっぽいことは言っていた。でも、私が思ったことは全く別のことであった。
夢に出てきた、「四日後、ずっと走り込みに行こうな」…だっけ？がずっと頭にくっついて離れなかった。

入学式を終え、家に帰った。
「ん、姉ちゃんおかえり。」
妹が少し上機嫌に言ってきた。私は何か気味悪いものを感じ取り、適当にただいまと返した。
「クラス替え、3組の最後だった。」
妹の学年は3クラスあり、その最後ということは、卒業式で最後に証書を貰うということなのだろうか。
でも別に、私には無縁な話だたったから少し無視した。
「あと、ミクちゃんとクラス同じだった。」
彼女の言う「ミクちゃん」と言えば、幼なじみでもある岡崎　美？ちゃんのことであろう。昔からよく遊んだりしていて、付き合いも長い。そんな一家の一人っ娘が
「あ、こんにちは…」
早速我が家のこたつで暖をとっていた。机の上にある缶入りのクッ

キーはきっと彼女が持ってきたものなのだろう。それをよければと言わんばかりに一つ私に差し出した。私はそれを笑顔で受け取り、おいしくいただいた。この無言のやり取りを、妹が不思議な目で見ていた。
クッキーをもらった後は、昨日学校から早速出された課題に取り組んだ。課題と言っても中学校で学習した内容の復習だったので、さほど苦ではなかった。
終わってちょうどくらいだろうか。携帯に一通のメールが来た。

「高校どう？」

それは中学時代の親友、千優（ちひろ）からだった。

私の住む県内で1，2を争うようなトップ校である豊原（とよはら）女子高校へ進学し、中学時代には勉強面でとてもお世話になりました。教え方もとても上手で、おかげで「下の中」くらいの成績も、「中の上」くらいまで上がりました。そうして偏差値５０とちょっとのこの疇撰大付属高の特待生として入学できたのも、彼女のおかげです。１０７人の特待生の中では「下の中」くらいですが、彼女にまた教えてもらえればきっと「中の上」まで伸びると信じてます。というか伸びてほしいです。

そんな彼女から４文字＋疑問符の短文。
私はそんなメールに
「まだよくわからない。でもたのしみ。」
と、ひらがなだけで返した。
さらにその返事には「やっぱり？みんなもそんなもんだって言ってるよ」の文章の最後に、笑顔の絵文字で返ってきた。
私はその返事はどうしようかと悩んだが、結局返さずじまいにしてしまった。

今夜は夕飯を姉が作ってくれた。最初の味はまあ普通なのだが、後味となっている隠し味でやはり私の料理に勝っている。その隠し味が何か、後で確かめておきたい。

入学式も済ませ、正式に高校生と認められた夜。私は複雑な心境にいた。机に伏すようにして、いろいろとモヤモヤしていた。その視界には高校で使う教材や、アルバム、トロフィーがあった。他のものは特に視界には入れなかった。
そんなことをしているうちに、私はそのまま寝てしまったようです。

……。
……お……き……？
またこの感じ。今度は女の人の声だ。
「……おと……きな……とは……起きな。」
声の主は姉だった。
「ちょっと起きてもらえる？話したいことがあるんだけど…。」
体を起こすと、私はいつの間にかしっかりと毛布にくるまって寝ていたようで。
訳も分からないままリビングに行くと、妹もしっかり起きていた。
「ねぼすけさんやっと来たか。」
『いつもの言葉』を私に投げつける。

ねぼすけはリビングの椅子に座った。すると
「突然だけど、二人に質問。私達3人に『馴染みのある人』って、どんな人？」
訳のわからないうちに、わけのわからない質問を姉が投げてきた。
「ミクちゃんとか……友達？」
早速妹が発言。友達と言えば私で言えば特にチヒロにあたる人物。

私は彼女とは中学時代で知り合ったので、『馴染みがある』かどうか聞かれたら迷うが、少なくとも妹とミクちゃんは幼『なじみ』。それはそうだといえるだろう。
「……家……族…？あと……親戚？」
私は混乱した頭を冷やし、空気を察して質問に答えた。『家族、親戚』と姉が頷きながらメモをとっている。
「…あぁ、あと部活とかの先輩・後輩！」
姉は少し納得しながら新たにメモをとり、妹は「まだそんなことはわりません」という意味を兼ねた冷たい眼差しで私を見る。中学時代を帰宅部で過ごした私に何か文句があるようだが、私はその視線を受け流した。
「まあ……こんなもんか。じゃあ本題。こういう人たちが突然いなくなt…」

「……姉ちゃん？そんな寝方して背骨痛くない？」
「そんなの困る！」
……アレ？また夢オチ？
そんなことより背骨が痛い。
やはり机に伏したままで寝ていたようだ。よく「寝相が悪い」と言われる私が、よく椅子から落ちなかったものだ。そう思うと、「何か変な感じ」だった。
「いきなり何言い出すと思えば…。まあいつもの姉ちゃんで安心した。」
そんなことより上体反らしができないほど背中が痛い。

４月１０日　（土）
私は少しずつ無理せずに、１時間かけて上体反らしができるようになるまでに回復させた。
まあ姉と妹に手助けとかしてもらったんですけど。

それにしても、「馴染みのある人がいなくなる」…？　あ、今度はしっかり覚えてた。

深読みしすぎなのだろうか。

「四日後ずっと走り込みに行こうな」…？こっちはあやふや。

と、何か関係がある気がする。

私第六感で感じ取った。

私はこの「裏の意味」について無駄な労力を使うことに決めた。

第一章　？4月12日

申し訳ございません。
大きなミスを犯してしまったせいで、大きく内容を変更（？）させていただきます。
その内容を知っている人は、どうか温かい目で受け流すようよろしくおねがいします。

２００文字突入しないと更新できないとか、そういうことは気にせず…。
入学式の内容、後付けじゃないですとか言ったら皆さん疑いますよね。本当ですよ。…たぶん。

まあここからは内容もメモに沿って行けば、それほど迷子にはならないかと思いますのでよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8903z/

或る陽、或る殊。

2012年1月3日01時04分発行